町民文芸

只見短歌会　二月詠草

大塚栄一　指導

側溝に落つる雪解け水の音今日も聞かむと散歩するなり　古川　英子

独り居の気丈な友は長く病み嫁の家近くで静養と聞く　吉津　政枝

雪まつりを祝ふ花火はそれぞれの願ひと共に打上げらるる　関谷登美子

年老いし我を気遣ひ日に一度娘は遠距離電話かけくる　馬場　八智

地方色取材に来たる若者ら米飴作りを丹念に聞く　渡部ゆき子

山肌に雪の亀裂が見え初め春の近きを思ひて眺む　目黒　富子

帰り来る夕べのバスに知恵遅き子らと合はせて声あげ唄ふ　五十嵐夏美

急須より垂る滴を見詰めつつ夫と在りし日思ひ出し居り　齊藤ちひろ

わが娘の誕生に買ひし雛人形喜ぶ孫と今年も飾る　渡部ヨリ子

夫とわが体拭き終へ洗ひ物引きずる如く娘帰りゆく　新国　洋子

（出　詠　順）

只見俳句会　三月例会

目黒十一　指導

除雪機に燃料詰める夕日かな　修一

見つけたる冬着の昔語る妻　一灯

早乙女のみな美しき雪祭　邦男

花曇り身体になじむ服を着て　先の豪雨の爪痕深しふきのとう　隆堂

小正月水木に飾る餅稲穂　春浅し雪に埋れて見ゆる句碑　邦夫

雛行季開けて見るだけ偲ぶだけ　三寒の四温は何処へ奥会津　吉児

三月の雪まだ続き峡に老ゆ　堅雪や風切り羽根の落としあり　恒夫

一山をゆるがす気合い白虎祭　奥会津四十八門越後より　リウコ

人の名や千葉より届く黄水仙　陽炎や明日に生きる糧となり　如月の月煌々と山の影　笑羊

春寒しドアの重たき待合室　光切る手の向こう側雪崩あと　都

初御籤吉に胸なで深大寺　あかぎれてエプロンはずす集会所　洋子

綾取りをせがまれていて毛糸編む　朧夜の語り部ざっと昔なり　一穂

山形の海は荒波鱈荷来る　玉子酒少しく甘し女人講　アツ子

けもの跡続きていたり雪野原　雪の日や赤き首輪の放れ犬　礼

暮れ際の土石かみたる大雪崩　水音に親しみいたる日永かな　又壱歩

立つ湯気に蕎麦粉の匂い小正月　枝よけて触れられそうな寒の月